



Title	ウシ副腎皮質シトクロムP-45011 β による 18 (OH) D Δ Gの19-水酸化反応
Author(s)	桃井, 京子
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33955
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	桃 井 京 子
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 6 4 1 6 号
学位授与の日付	昭和 59 年 3 月 24 日
学位授与の要件	医学研究科 生理系専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	ウシ副腎皮質シトクロム P - 450 _{11β} による 18 (OH) DOG の 19 - 水酸化反応
論文審査委員	(主査) 教授 山野 俊雄 (副査) 教授 萩原 文二 教授 松本 圭史

論文内容の要旨

(目 的)

副腎皮質におけるステロイドホルモン合成に関する研究の途上、当研究室に於て、ウシ副腎皮質ミトコンドリアを用いた 18-ヒドロキシデオキシコルチコステロン (18(OH)DOC) の水酸化によって 11 β -水酸化物である 18-ヒドロキシコルチコステロン (18(OH)CST) の他に、今迄報告されていない物質が生成される事が見いだされていた。従来より副腎皮質ミトコンドリアは、ミトコンドリア内膜に局在するシトクロム P - 450_{11 β} によるステロイドの 11 β -及び 18-水酸化活性が知られているが、著者は、新物質の生成を触媒する酵素、および未知物質の構造をあきらかにすることを目的として本研究を行った。

(方法並びに成績)

1. 新物質を生成する酵素の同定

Suhara らの方法を用いてシトクロム P - 450_{11 β} を精製し、11 β -水酸化活性と構造未知の物質の生成活性が分離されるか否かを調べた。11 β -水酸化活性と構造未知の物質の生成活性は、酵素精製の各段階において等しい挙動を示し、精製した酵素標品を用いた再構成系においても構造未知の物質の生成は観察された。また、反応時間、酵素濃度、基質濃度に関係なく、2つの生成物は常に等比で生成された。これらの結果により、構造未知の物質は、シトクロム P - 450_{11 β} の触媒によって生じたものだと考えられた。

2. 未知物質の構造

構造未知の反応生成物を、C₁₈-逆相カラムを用いてさらに精製し、質量スペクトル及び ¹H-NMR

スペクトルによってその構造を推定した。

精製した反応生成物のFD-MSスペクトル及び、メチルオキシムートリメチルシリル(MO-TMS)誘導体のEI-MSスペクトルより、構造未知の物質は $18(\text{OH})\text{CST}$ と等しい分子量(362)、水酸基数(3個)、カルボニル基数(2個)を持つと考えられた。ただし、各イオンピークの強度が異なるので、構造未知物質と $18(\text{OH})\text{CST}$ は構造異性体であることが予想できた。さらに、本物質の $^1\text{H-NMR}$ スペクトルより、19-メチル基が水酸化されていることが示唆され、構造未知の物質は $18,19\text{-ジヒドロキシデオキシコルチコステロン}$ ($18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$)であることが推定された。このことは、化学合成された $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ と未知物質が逆相カラムにおける保持時間、 $^1\text{H-NMR}$ スペクトル、MO-TMS誘導体のGC-MSスペクトル等において一致することからも確認された。

3. $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ の生理活性

さらに、本物質の生理的役割をしらべる目的で、 $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ 、及びその代謝物質として予想される18-ヒドロキシ-19-ノルデオキシコルチコステロン($18(\text{OH})19\text{norDOC}$)の、鉍質コルチコイドレセプターへの親和性を測定した。その結果、 $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ はラット腎臓鉍質コルチコイドレセプターに対して低い親和性しか示さなかったが、 $18(\text{OH})19\text{norDOC}$ はアルドステロンの約250分の1の親和性を示した。これは、鉍質コルチコイドである $18(\text{OH})\text{DOC}$ や抗ミネラルコルチコイド作用を持つスピロラクトンとほぼ等しい親和性である。

(総括)

$18(\text{OH})\text{DOC}$ をウシ副腎皮質ミトコンドリアとインキュベートすることによって生じる2種の生成物について次の事があきらかとなった。

1. これら2つの生成反応は、いずれもシトクロムP-450_{11 β} 水酸化酵素系によって触媒される。
2. 生成物のひとつは11 β -水酸化物の $18(\text{OH})\text{CST}$ であり、他は19-水酸化物である $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ であった。
3. $18,19(\text{OH})_2\text{DOC}$ は、いままで報告されていなかったステロイドである。このステロイドは、鉍質コルチコイド活性を有する $18(\text{OH})19\text{norDOC}$ の前駆体と考えられる。

論文の審査結果の要旨

シトクロムP-450_{11 β} 水酸化酵素系はステロイド11 β 、18位水酸化を触媒することが知られている。本論文においては、新しく19位も水酸化することが明らかになった。その水酸化反応の結果、新たなステロイド物質として $18,19\text{-ジヒドロデオキシコルチコステロン}$ が見出された。構造決定はfield desorption質量分析およびNMRを用いてなされ、化学的合成によっても確められている。最近19位に修飾を受けたデオキシコルチコステロンのミネラルコルチコイド活性が強いことが知られるようになったが、本論文はそれらの19位水酸化ステロイド物質の生成機作の研究に有力な手がかりを与える。したがって充分学位に値するものとして評価できる。